「ポレーシェ」とは、チェルノブイリ付近の湖沼低地帯の呼称です。

2023 年 4 月 15 日発行　　特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部

終わりの見えない苦しみ　～ウクライナからのメッセージ～

「チェルノブイリの人質」基金　　イェウヘーニヤ・ドンチェヴァ

かくして戦争の 1 年が飛ぶように過ぎました。私たちの国と国民にとって、悲しみと苦しみの 1 年でした。言葉を選ぶのは困難です――私たちは生き、働き、なにがしかの休息を取り、笑うことさえあります。しかしやはり、私たちの生活に日々入り込んでくるニュースに、苦痛を感じているのです。

もし今日、おまえの生活で何が一番変わったのかと聞かれれば、それは不安定さということです。何でも好きなことを予定はできますが、いったん空襲警報が鳴れば、その予定はすべて崩れ去ってしまい、腹立たしく思うことになります。でも残念ながら、何もすることができません……。そしてまた、私たちは明日という日への確信が持てなくなりました。今日も、私にはわかりません。1 ヶ月先に何をしているか、もし息子に徴集令状が来て前線に連れて行かれたら、彼はどのように自分の人生を築いていけるのか、孫はどの学校に入ることになるのか(この国で、それとも他の国で)。

何も後回しにはせず、すぐにやってしまう、明日という日はないかもしれないのだから――という習慣ができました。価値観は別のものになりました。今はもう、誰も家具や冷蔵庫、洗濯機を買いません。すべてはリュックに、あるいは車に収まるものでなければなりません。

戦争で経済は打撃を受け、人々の所持金は顕著に少なくなりました。多くの企業が閉鎖され、人々は仕事を、それに伴って給与を失いました。食品の価格は平均 40％上がりましたが、給与は従来通りです。年配の人たちは非常に苦しい思いをしています。以前、私が市場に行くと多くの人がいて、皆何かを買っていました。ところが今は人は半分に減りました。何かを買うお金がないのです……。食料品店は半ば人気(ひとけ)がなく、皆歩き回って眺めていますが、買う人は少ない です。(次ページへ続く)

2022 年 3 月 28 日
チェル救からの第 1 便の支援物資を運ぶ消防士たち

2022 年 6 月 3 日　第 2 便も無事に届きました

2022 年 12 月 9 日
医薬品を受け取るウショームィルー次保健・医療センターのスタッフたち

被災したホステージ基金の事務所

私の事務所は2022年3月4日、第25番学校のミサイル攻撃の際に被災しました。5月になってやっと修復し、以前の仕事のプロセスを再開することができました。もちろん仕事やプロジェクトは増え、私たちは一度にいくつもの方面で仕事をし、しばしば全く時間が足りません。また、仕事はしょっちゅう空襲警報で中断され、戦時下の規則で、私たちは事務所の建物を離れシェルターに行かなければなりません。空襲警報は 2〜4時間続くこともあります。ですから、私は自宅で、時には夜中、あるいは朝早く仕事をしています。

雪原で地雷撤去作業を行う消防士たち

私たちの州には今、国内避難民と呼ばれる人たちが 2 万人います。多くは、空き家のあった村に住み着きました。非常に多くの団体が彼らの支援をしています。確信を持って言えるのは、今日、避難民の人たちに大きな支援をする部局が作られたということです。最初の 1 ヶ月は、制度も人も支援もなく大変でしたが、今では体制がすべて整っています。国は家族の一人一人に支援金を支給し、慈善基金がそれに加えて衣服や食品を供給しています。子どもたちは幼稚園や学校に通っています。

地元の人たちは、このような人たちに理解と同情を持って接しています。彼らは財産をすべて失い、戦争の恐ろしさをいやというほど見てきたのです。誰もが支援しようとしています。

2014 年から 2022 年の間、それは私たちが過ちを犯した時期でした。8 年間、私たちは何かを調整し、何とか話し合いで取り決めをしようとしてきましたが、すでにその時、武力衝突は私たちのもとに死と戦争の恐怖をもたらしていたのです。

苦しみと苦い涙。今次々に墓碑が立てられている私たちの軍人墓地を見るのが何とつらいことでしょう。私たちは、2022年夏に、そうでなければ秋に、すべてが終わることを本当に期待し信じていました。でもその後で私たちは皆、これは非常に長い戦いになるのだということを理解し始めました……。そして、私たちの州境まで40㎞ほどの距離にあるベラルーシは、いついかなる時にも、ロシア側に立って戦争に加わるかもしれないのです。

2023 年 1 月 22 日
ウクライナ侵攻以来初めて、粉ミルクを必要としている子どもたちのためにナロジチへ向かうドンチェヴァさん

残念なことに、人類はすでに、人間によって作られた兵器がどのようなものになり得るかを目撃しました。でも、地球は核攻撃に耐えられないでしょう……。この恐怖すべてが、終わってほしいと思います。本当にそう思います……。

今日、私の日本へのメッセージは、ごく単純なものです。世界を大切にして下さい、世界は本当に壊れやすいものです。皆さんの子どもたちがミサイル攻撃で苦しみ、死んでいくようなことにはしないで下さい。日本のお年寄りが尊厳のある晩年を、シェルターの中でなく、過ごせるようにして下さい。自分の国を、自分の国家と領域を守って下さい。国民は戦いの中で鍛えられますが、平和な生活の中で繁栄するのです。今ウクライナが災いの中にあるのは、本当に残念なことです……。

ウクライナ支援チャリティ報告会＠南相馬市小高区　　（戸村京子）

2 月 23 日(祝)に南相馬市小高区の浮舟文化会館で、「ウクライナ支援チャリティ報告会」(希来(きら)基金主催)が、ロシア軍の侵攻から 1 年、一日も早い戦争の終結を願って開催されました。ウクライナの子どもたちの絵画展、子どもたちや出会った人々の笑顔、平和で色彩鮮やかな風景などの写真展（すぎた和人氏撮影）も。シンポジウムでは希来基金代表の小林友子さんがこれまでの支援活動を報告、次に「チェルノブイリの人質たち基金」のドンチェヴァさんからのビデオメッセージ、ウクライナ避難者の生の声を聞くなどの内容でした。

小林さんは、寄付金でオブルチ地区の消防士たちへの物資の提供、学校の子どもたちへの支援を報告し、戦渦の下の友人・知人の安否を心配して福島の地から寄せる想いを静かな口調で語られました。筆者もチェル救の緊急支援の取り組みや、ウクライナの「戦争前と侵攻後」の様子を対比させながら紹介しました。

そして、ウクライナ東部の都市ドネツクから愛知県に親子で避難されているアナスタシアさんにお話していただきました。持参された写真は、自宅の窓から撮影したミサイル攻撃により住宅から立ち昇る煙、自宅隣の爆撃で破壊された家、当時 11 才の息子さんの友達を招いた誕生会、ドネツクの街の風景等。彼女は「私たちのきれいな街は 2014 年から戦争が続いています。街中ではロシアの『プロパガンダ』ばかりで、ロシア製の品物や食べ物は粗悪で、もう 1 か月の我慢、もう 1 か月・・・と耐えてきましたが、子どもを守るため避難しました」と語られました。

現在もロシア軍の攻撃で破壊され続けている現状に、早く平和になってほしいといたたまれない思いでした。

2023 年度の通常総会のご案内

日時　6 月 10 日（土）午後 2 時～4 時

会場　なごや人権啓発センター ソレイユプラザなごや 研修室

＊名古屋市中区栄一丁目 23 番 13 号　伏見ライフプラザ 12 階

＊地下鉄伏見駅 6 番出口より南へ徒歩 7 分

●第 1 部　ホステージ基金 ドンチェヴァさんのビデオメッセージ上映（午後 2 時～2 時 30 分）
●第 2 部　通常総会（午後 2 時 30 分～4 時）

ロシアによるウクライナ侵攻で、この 1 年は経験したことのない緊急支援を行うことになりました。

ドイツの「アクション・チェルノブイリ」と協力し支援物資を輸送。戦禍でも途絶えることのなかったクリスマスカード・キャンペーン。支援の調整を一手に請け負うホステージ基金のドンチェヴァさんの八面六臂の活躍。…総会ではこの一年の活動を振り返ります。

正会員・賛助会員の方たちだけでなく、どなたでも申込みせずご自由に出席していただけます。どうぞお気軽にお立ち寄りください。

「フクシマを忘れない」はどこへ行った

～福島第一原発事故から12年経って思うこと～

（池田光司）

原発はさも安全であるかのように、再び原発が動かされようとしています。昨年 12 月経済産業省の「原子力小委員会」において、「原発の再稼働促進」「既存原発の最大限活用(運転可能期間を原則40年から60年＋停止期間に延長)」「次世代原発の開発建設」「再処理、廃炉の加速」という行動指針案が了承されました。今年2月末には、原発の運転期間延長が含まれた「グリーントランスフォーメーション（GX）脱炭素電源法案」が閣議決定されました。この法案では、“安全確保を大前提とした原子力の活用/廃炉”がうたわれています。まるで安全神話が復活したように、原子力発電の推進が図られています。“厳しい安全審査”や“確実な点検・保守”という言葉はありますが、具体的にどんなリスクを想定してどんな対策を打って安全とするかは“専門家”に任されています。老朽化した原発が何基も動く中、リスクを読み切って原発事故を確実に防げると言い切れるのでしょうか。

福島第一原発事故から12年、あらためて放射線量率マップを見ています。1号機、3号機、2号機と次々にメルトダウン、大量の放射能がまき散らされました。さらに深刻な事態になった可能性もあったと言われています。原発事故の底知れない恐ろしさがよみがえってきます。地震と原発事故の被害を同時に受けた人々、その心身に受けた苦痛は、被害を受けていない私には推し量ろうとしても推し量ることはできません。

原発推進を決めた人々は、原発事故で起きたこと、そして今も起きていることをどれだけ推し量ったのでしょうか。地震、津波、そして戦争と原発、危機は掛け算でやってきます。放射能を貯め込みながら発電する原発、動かしてはいけないと思います。

伊那市で 3. 11 集会と映画会　開催

長野県南箕輪村　　原　富男

伊那市で 3. 11 福島を忘れない上伊那アクション（実行委員会 31 団体）主催の催しが行われました。例年 3・11 当日の午前に屋外集会とデモを行い、午後に講演会や映画会を行ってきましたが、丸一日では体がきついということで今年は、前日の夕方集会、当日午後に映画会としました。

3 月 10 日夕方からは「いなっせ」広場で集会が開かれました。集会には上伊那各地から 90 名近い人々が参加しました。主催者挨拶の後、参加者が交代でマイクを握り、口々に原発ゼロの思いを訴えました。

3 月 11 日、午後 2 時からは伊那図書館で映画「原発をとめた裁判長・そして原発をとめる農家たち」の上映会が行われ 49 名の参加がありました。映画に先立って、今の原発の動きを私が 30 分程度紹介しました。特に政府が「脱炭素社会の実現とエネルギーの安定供給」の為の GX 基本方針を閣議決定したことを問題にしました。

この基本方針は原則 40 年・最長 60 年とした原発の運転期間を今後 60 年超えも可能としており、危険な老朽原発の稼働を容易にするものです。また次世代型原子炉の建設をすすめるなど、福島原発の事故被害をかえりみないものです。

映画は 2014 年、関西電力大飯原発の運転停止命令を下した樋口英明・福井地裁元裁判長の話です。樋口さんは「原発は運転を止めるだけでは安全とならない。水で冷やし続けなければ事故が起こる。原発設計時の耐震基準が余りにも低いため過酷事故は起こる、判決で「環境問題を原発の運転継続の根拠とすることは甚だしい筋違いである」と述べています。

また映画では、原発に頼らず農業とソーラー発電を同時に行う二本松や野辺山でのソーラーシェアリングが紹介されていました。野辺山発電所は生活クラブ生協が作った発電所であり、私は 2 回見学したことがあります。近日中に生活クラブ電気と契約する予定です。

ウクライナ戦争≪2022/02/24 ロシア軍侵攻≫から一年　東海地域での支援活動

あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク と チェル救の声明

（戸村　京子）

【始まり】 2022 年 5 月から「あいち・なごやウクライナ避難者支援ネットワーク」の活動が始まり、チェル救所属のコアメンバーとして参加しています。当初は、今何が必要か、私たちに何ができるのかと手探りでした。

日本ウクライナ文化協会（JUCA）は、避難されてくる親族や東部・南部の激戦地から逃れてきた親子の支援を始めていました。30 数年前のチェル救設立時から、また NPO になった JUCA には『チェルノブイリと福島－母親たちの心をつなぐ手紙集』の翻訳でお世話になりました。チェル救は現地の支援を行っていますが、JUCA の支援活動をサポートできないかと、数人で動き出しました。

そして 2022 年 5 月に「同ネットワーク」（RSY に事務局）を結成、名古屋市との協力体制もできて、支援活動を市民にアピールし寄付金を募って、本格始動となりました。

【現在は】 現在、ウクライナ避難民は全国で 2,223 人、東海地域では 60 世帯 101 人(3 月 15 日現在)です。

JUCA は、名古屋での戦争反対のデモや集会、物資支援、日本語教室、バザーの手作り品販売で本国支援金を集めるなどを行っています。

避難者支援ネットワークとしては、避難者の住宅入居や就労支援、支援物資の受け入れと配分、個別支援、各市町村受入れ機関との情報共有と調整などを行っています。また、1 ヶ月に一回、他の団体と情報共有するための会議を持ち、2 月で第 9 回目と回を重ねています。

支援物資の棚

当初は短期間の避難と考えられていたのが、現在も帰国の見通しが立たない状況です。破壊された街の復興も長期にわたると予想されます。この間、世界各地の災害等も重なり、ウクライナへの関心、寄付金の減少が言われています。私たち市民は、民間団体として支援を続けたいと考えています。

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻反対の声明

2023 年 2 月 24 日　NPO 法人チェルノブイリ救援・中部

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻開始から 1 年が経ちました。依然軍事侵攻は続き、多くの市民が甚大かつ深刻な被害を受けています。また、ウクライナ南部にあるザポリージャ原発は未だロシア軍の管轄下にあり、大事故につながる危険を抱えた状態と言われています。このような状況を鑑み、私たちはあらためてロシアによるウクライナへの軍事侵攻に強く抗議し、ロシア軍のウクライナへの攻撃の即時停止およびウクライナからの速やかな撤退を求めます。また、一日も早く原発を安全な管理下に戻すことを求めます。

私たちは、1986 年旧ソ連で起こったチェルノブイリ原発事故の被災者となったウクライナの人々を 30 年以上にわたって支援してきました。被災者の方々は、原発事故により、突然故郷を追われただけでなく、長きに亘って心身の病に侵されるなど、この上ない苦しみを受けてきました。今、その人々が、ロシアの軍事侵攻によって命の危険にさらされています。侵攻によって故郷を追われた人々、爆撃による破壊を受けた人々、家族と引き裂かれた人々、空襲警報の中で暮らす人々、受けられるはずの治療を受けられない人々、・・・、挙げ切ることのできない苦しみを受けていると思います。為政者には、原発事故と軍事侵攻という二重の不条理を背負わされた人々の苦しみは、届かないのでしょうか。悲痛な叫びは届かないのでしょうか。市民を敵に仕立てて、武力の行使を続けていくのでしょうか。

一方、この苦しい戦時下の中、互いに助け合う人々がいます。医療機器や薬を必要とする人に届ける人々がいます。私たちは、自らも苦しい状況にある中、助けの手を差し伸べる人々に驚きと敬意を感じながら、そのような人々を支援しています。国を越えた市民同士の助け合いと支え合いが、命と希望をつなぎ、平和に向けた灯となり力となることを願います。いかなる理由があっても、市民の命と希望を奪い平和に向けた灯を消す武力行使は許されません。武力行使を即時停止してください。

キーウを逃れて　　イリーナ・ペトリチェンコ

２月～４月は、現代ウクライナに重大な影響を与えた悲惨な出来事が集中する時期です。

１９８６年4月２６日には、チェルノブイリ原子力発電所の事故があり、２０１４年2月２０日には、キーウ市内の反政府デモ参加者を警察隊が射撃し６０人以上が即死、計９８人も亡くなりました。２０１４年３月には、ロシアによるクリミア半島の違法合併、２０１４年４月には、ウクライナ東部のルハンスク州やドネツク州において親ロシア派の擬似独立隊が形成しウクライナ軍との武力対立が始まります。ロシアは長年その軍事的支援を否定し続けていましたが、２０２２年2月２１日には、「ドネツク人民共和国」と「ルハンスク人民共和国」の独立をついに承認。そして、２０２２年2月２４日には、ロシアによるウクライナ全面的侵攻、忘れたくても忘れられない「暗闇」が始まっています。

この１年間は悲しいパーソナルストーリーを散々聞いてきました。８年前に安全だと思ったキーウ州に避難しましたが、同じカバン一つでまた避難者になってしまうウクライナ東部出身者。日本で働く息子の元へ避難する最中、息子が事故死となり自分がお葬式のために日本に来たと嘆くお婆さま。ブーチャ出身者で去年の３月に心理コンサルタントの力を借りたことを自慢げに話す中年女性。なぜなら、プロの助けを求めなかった友人には、怒りが健康を食ってしまい、秋ごろ次々と癌が発見されたのですから、…。

でも、周りには悲しいことばかりではありません。赤の他人のために必死に頑張る無数の人たち。この３月「人生で一番厳しい冬を乗り越えられた！！！」と、ＳＮＳで喜ぶ友達。キーウ市長まで、２０２３年２月２４日に市のホームページで発表した年間統計※1（長めの訳ですが、どうか最後までお読みください）↓。

- 警報サイレンが６８０回と鳴り※2、地下鉄が防空シェルターとして同時に６６９４０人まで収容できた；
- ミサイルやドローン攻撃に起因する火災が４８回おこり、述べ７１３人が負傷し、１６０人の民間人が死亡した（うち未成年者５人）；
- ７００以上の建造物が被害（うち高層住宅が４１７棟、一軒家が１０９戸、教育機関が９３棟）；
- キーウ市で住民登録をした国内避難者が２２９０００人以上（うち４万人が未成年）；
- 市の人道センターが１３０以上の国際パートナーから支援物資を受領し、戦争初期の数ヵ月の間、毎日８０００人以上に支援物資を配布；
- 約６０００本の木が植樹され、新カップルの２４８５２組が結婚し、２６８８組が離婚した；
- １６４６１人が誕生し、うち男児８５０７人、女児７９５４人、双子２７８組、三つ子４組.

このような統計、いかがでしょうか。闇がいくら暗くても、夜は必ず明けるのですね。

（次号へ続く）

※１．https://kyivcity.gov.ua/news/vitaliy_klichko_v_tsifrakh_rozpoviv_yak_oboronyalasya_zhila_i_pratsyuvala_stolitsya_rik_povnomasshtabno_viyni/（２０２３年3月１４日閲覧）。

※２．別の統計によると、キーウ市の空襲警報が２０２２年２月２４日～１２月３０日、合計６９３時間４９分、つまり、日間で計算し直せば、約２９日間も継続していた https://tvoemisto.tv/news/u_kyivskiy_viyskoviy_administratsii_pidbyly_pidsumky_roku_141688.html、（２０２３年3月１４日閲覧）。

連載 145　　トリチウム汚染水の海洋放出・何が問題か

―――風評被害でなく実害をもたらす―――

事故から12年、福島原発の廃炉作業は一向に進まない。地下水や雨の流入、炉心冷却などで今も毎日 120 トンの汚染水がたまり続けている。汚染水の量は 130 万トン。国と東電は貯蔵タンクの場所がなくなり、この梅雨明け頃から海洋放出するという。2015 年に東電が県漁連と交わした「関係者の理解なしには海洋放出しない」という約束を一方的に踏みにじる暴挙である。漁業関係者にとって「汚染水の海洋放出」は事故の再来に他ならない。また、海洋放出はいったん始まれば 30 年以上継続する。

汚染水の何が問題か

膨大な量の汚染水は当然放射能を含む。これまで ALPS（多核種除去装置）で処理しているが、その 70%にはセシウムやストロンチウムなどがまだ残存し、再処理が必要である。問題は ALPS で処理できない「トリチウム水」である。水素（H）の仲間のトリチウム（T）はベータ線を出す放射能で、トリチウムを含む水は ALPS では除去できない。通常の原発排水にもトリチウムは含まれるが処理できないのでそのまま放出している。ベータ線はエネルギーが小さく影響が小さい、というのが生物を知らない原子力村の専門家達の主張である。生物は通常の水（H20）とトリチウム水（T20）を区別できない。体内に入ると様々な生化学反応に関わる。例えば澱粉や蛋白質の加水分解反応では生成物のブドウ糖やアミノ酸に水の水素が取り込まれる。トリチウム水があればトリチウムで汚染したアミノ酸やブドウ糖が出来る。これを原料にして、生物は自分の体内の蛋白質や DNA, RNA 等の核酸も合成する。これを有機トリチウム汚染（OBT 汚染）という。水素と違いトリチウムは崩壊してヘリウム（He）という安定元素になる。He は他の元素と結合出来ない為 DNA に結合したトリチウムが He に変わると DNA は壊れる。即ち遺伝子の崩壊である。更に汚染したプランクトンや小魚を食べた魚は食物連鎖による生物濃縮でトリチウム濃度が上がっていく。こうした事実は、1950 年代の大気圏内核実験の頃から研究が進み、放射線生物学の常識 1 である。だが、東電は汚染水中の OBT をこれまで一度も測定していない。国と東電はトリチウム汚染水が風評被害だと主張するが、風評ではなく実害が生ずる。

トリチウム水は処理できる

トリチウム水（T20）と通常の水（H20）は化学的には分離できないが、物理的性質の違いを利用すれば分離可能である。H20 の質量は 18 だが T20 の質量は 22、即ち重さが 1.2 倍も違う。当然大きさも違う。沸点は H20 が 100℃、T20 は 101.5℃。氷点は H20 が 0℃、T20 は 4.5℃である。即ち、T20 は 4.5℃で凍る。こうした物理的違いを利用した分離方法は色々開発され、研究者や企業が提案しているが東電と国は無視している。東電の汚染水を一日 500 トン～1000 トン処理できる方法まで提案されている。130 万トンの汚染水から T20 を純度 100%に分離できれば、たった 8.8ｇにしかならない。10 年前からこうした処理技術を実用化していれば今頃は処理出来ていた可能性がある。問題は費用である。垂れ流しの方が安くつく。考えてみるがよい。質量が 1.2%しか違わないウラン 235 を天然ウラン 238 から分離精製し、５%に濃縮して原発の燃料に、100%に濃縮して原爆の原料にしている。トリチウム水の処理が可能になれば、現在垂れ流し中の原発冷却水や再処理工場廃水も処理しなければならなくなることを彼らは恐れているのではないか。

（2023 年 3 月 18 日　河田）

【寄付・会員状況のお知らせ】

◆1 月　寄付／会費　298,330 円
◆2 月　寄付／会費　1,243,784 円
◆2022 年度累計（ウクライナ救援基金を除く）
4,987,126 円（2 月末）

◆ウクライナ救援基金　22,229,145 円
（2022/3/7～2023/2/28）

◆会員数　183 名
◆ポレーシェ読者数　666 名

～心温まるご支援をありがとうございました～

【寄付のお願い】

◆一般寄付
三菱UFJ 銀行　高畑支店　普通　1682863
◆ウクライナ救援基金
三菱UFJ 銀行　名古屋営業部　普通 6949211
◆郵便振替　00880-7-108610
〈口座名義〉
特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部

＊クレジットカードでも受け付けております
（ページ下の QR コードから寄付ページへアクセス！）

※領収書が必要な方はご連絡ください

当団体は「認定特定非営利活動法人」ではございませんので、ご寄附は税額控除の対象にはなりません。
ご了承のほどお願いいたします。

事務局だより

クリスマスカードキャンペーン報告―「福島」・南相馬編

「あれ？南相馬の子ども達にプレゼントしたいカードが足りない。どうしよう？贈ると決めた子ども達には、もれなく届けたいのに。」「福島の被災地のことが忘れられていくのか？」―今、落ち着いて考えれば、理不尽な戦争真っ只中にいるウクライナの子ども達に、まずは、何かできないか？と人々は思い、ウクライナへのカードを・・・となったに違いないのだが。・・しかし、その時は、事務局約一名、「どうしよう。どうしよう？」と困惑の右往左往（汗）。ひと通り？！あたふたした後、結論。「南相馬の子どもたちに届けたいならば、足りなければ、作るのだ。今一度呼びかけ、もれなく届けよう！」と、近くの人達に呼びかけることにした。

呼びかけに、皆さんの対応は素早く、熱意！のカード作りとなった。事務局の「どうしよう」状態の真っ只中に、たまたま事務所に訪れた NGO 研修生の女性は、その慌てぶりを見かねたのか、なんと 26 枚ものカードを作り送ってくださった。大感謝！

（特活）チェルノブイリ救援・中部事務局　様

～メリークリスマス～　～Happy New year～

チェルノブイリ救援・中部事務局のみなさま
毎年、あずま保育園の園児全員にクリスマスカードを贈っていただき
ありがとうございます！
子どもたちは、「何が入っているかな～」と、とてもわくわくしながら
封筒の中をのぞきこんでいました。一つひとつ手作りのクリスマスカードに
みんな笑顔があふれました。
保育園でも、年長児がクリスマスツリーを飾り、踊ったり歌ったり、
サンタさんからプレゼントをもらったりと、楽しいひと時を過ごしました。
みなさまに贈っていただいたカードは、一人ひとりの手に渡り大事に持ち帰りました

これから、冬本番です。健康体に気を付けてお過ごしください。

2023　1月
梅田高市立原町あずま保育園

原町あずま保育園からの手紙

そうこうする内、瞬く間にカードは集まり、904 通のカードを、南相馬の幼稚園、保育園、子ども園、そして小高区の小中学校、子ども食堂の皆さんに等々に届けることができた。また戦時下で、「福島」へ思いを馳せながら作られたウクライナの子ども達からのかけがえのないカード 355 通も、無事届けることができた。

平和と希望、共生への思いをとりどりに表現したカードは、ウクライナ、そして南相馬の子ども達に、笑顔と温もりを届けるミッションを完遂し、2022 年度クリスマスカードキャンペーンは、多くのご協力により終了した。心より感謝申し上げます。（山盛）

発行　特定非営利活動法人　チェルノブイリ救援・中部
〒460-0012　名古屋市中区千代田 5 丁目 11-33 ST PLAZA TSURUMAI 本館 5B
TEL＆FAX　052－228-6813（月・水・金　10:00 ～ 15:00）
E-mail　chqchubu@muc.biglobe.ne.jp　URL　http://www.chernobyl-chubu-jp.org
印刷　エープリント

http://www.chernobyl-chubu-jp.org/kessai.html